■6次産業化を志す生産者たちを支援してきた杉山さんにお聞きします

6次産業化に取り組む方々と、どのように向き合いサポートされていますか？

「たった一人で頑張っている人でも応援できるのが、6次産業化という仕組みです」。こう説明するのは、文部科学省出身という異色の経歴を持ちながら、農業や漁業従事者のビジネス支援を数多く手がけてきた杉山さん。6次産業化を目指す当事者が個人事業主であれば、なおさらサポートする人材が必要だ。

杉山さんによると、6次産業化のサポート役は、全体を監修していけるジェネラリストと、デザイナーや食品加工業者など専門性の高いスペシャリストの2タイプに分けられる。最初にジェネラリストが赴いて6次産業化を目指す生産者たちの状況を見極めたうえで、必要に応じ各分野のスペシャリストを適宜派遣するスタイルこそ、効率の良いフォローアップだと杉山さんは考えている。杉山さんの場合、主に前者の役割を担う。聞き役に徹しつつ、たとえば支援先が農家なら実際に農作業を手伝うところから始める。生産者の苦労に共感するためだけでなく、作業処理時間、人件費などを見積もり、具体的な数字へ落とし込むためだ。「収益性やコストを全部計算し、それを事業主さんのものにしていただく」と言う杉山さん。一緒に話をしながら数字にまとめ積みあげる。すると、生産者側の経営への意識がより強まり、希望する事業の骨格が固まっていくという。各所との連携には、青森出身である杉山さんの人脈が活かされている。

農業の6次産業化を試みるにあたり、注目すべきは食だけにとどまらない。「環境保全、エネルギー問題などにまつわる様々な仕掛けや知恵を出すことで、面白いことができます」と杉山さんは訴える。無限の多様性を秘めた6次産業化へ向け、杉山さんは支援者の育成にも熱心に取り組む。現在の支援者から未来の支援者へとバトンを渡すことも忘れない。

豊かな資源と食材を蓄える青森に住む杉山さんは、それらを活かして青森から物や情報を発信していこうと気概に満ちている。

専門家活用術

総合化事業計画も多種多様、タイプの異なる事業にも柔軟に対応する専門家を。

昨年より杉山さんと行動を共にしているのは、大崎陽一さんと齋藤拓也さん。歳はそれぞれ31歳、27歳、と支援役のなかではかなりの若手だ。杉山さんが事業のアウトラインを形作り、細やかなやりとりを若手の2人が担当するパターンが多い。

弘前でにんにくの生産・加工を行う鬼丸農園も、3人で訪問する事業者のひとつ。鬼丸農園の奈良公雄さんは現在にんにくだけを扱うが、今後はりんご産地である地の利を活かし、カットりんごのパックを加工販売する事業を計画中だ。そのためには、200ヘクタールのりんご農園を適切に管理し、加工場の整備も必要となる。一口に6次産業化といえども規模は異なり、鬼丸農園のプランは町の一大産業となるほどのスケールだが、その分、支援役の杉山さんへ期待がかかる。数々の巨大プロジェクトを処理してきた杉山さんの腕の見せ所であるからだ。

それに連動し、創業支援の経験値が高い大崎さん、地域活性化支援を行う齋藤さんは、それぞれの強みを惜しみなく発揮する。鬼丸農園を切り盛りする奈良さんの子供たちは広報を担当しているが、2人と同世代であることから、お互い気負いなく話せるメリットも。各支援役が自らの役割を心得、鬼丸農園も各人の長所を活用する理想的な関係だ。

（上）加工品のラベル選定に、若手同士で会話が弾む。大崎さん、齋藤さんがデザインしたラベルの商品も完成間近。
（下）一丸となって6次産業化を進める、鬼丸農園のスタッフと支援役3名。

■お二人に学ぶ6次産業化へ向けての心構え
1個のりんごを中心に広く俯瞰するセンスを

「休みがなくても辛くない。ほんと、天職です」と支援役の杉山さんが語れば、「農家はサラリーマンと違って自由です。1日16時間、20時間働いても別にいいのですから」と対馬さんは穏やかに話す。6次産業化という新規プロジェクトに飛び込んだ2人は今、大いにこの状況を楽しんでいる。2人が出会った頃、法人化を考えていた対馬さんに、まず杉山さんは株式会社でなく低資金、短時間で設立できる合同会社を勧めた。株式会社より負担が軽く、また法人として対外的に十分通用するため、個人事業主向きなのだ。そうして一つひとつ相談していくうち、あきらめかけていたことが実現できるようになり、対馬さんは専門知識の豊富な杉山さんへ全幅の信頼を置くように。杉山さんも、りんご園を奇跡的な完全無農薬の自然農法で営みながらも驕り高ぶらない対馬さんの人柄に深い敬意を払う。

お互い波長が合うと語る対馬さんと杉山さんは、「戦友」のような関係とか。

あらゆる食材のなかで、りんごしか作っていない。でも、そのりんごで何が提供できるか、と常にアンテナを張り巡らせる対馬さんは、消費者の安心や健康を願いながら幾つもの加工品に挑戦してきた。農薬を一切使用しない農業とは、自然との共存でもある。りんご園の経営について「『生活のため』だけだとさみしい」と語る対馬さんは、りんごへの消費者のニーズや、環境保全までを見通しつつ6次産業化を選択した。1個のりんごを中心に事業の周辺をもまとめて俯瞰してみせるセンスは、生産から流通まで一貫して手掛ける6次産業化を推進する上で必要不可欠なものだ。そこへ農業事情にも詳しい杉山さんが加わり実務面で支援することで、ビジネスとして成立していく。世の中が自然と6次産業化の方向に動いているのは確かだと杉山さんは考えている。その流れに乗るには広く俯瞰する力、知識、そして人との繋がりがカギなのである。

特選りんごのみを用いた贅沢なジュース「神々の林檎」は2012年、皇室御献上品に。

「りんごジュースの格を上げたい」との目標を掲げて作られた「農薬不使用りんごジュース」。

「まっかなほんとのアップルペクチン」は、医学界でも注目を集めるペクチンを豊富に含む。

Profile-1

対馬 正人（つしま まさと）

1965年生まれ。合同会社まっかなほんと代表、青森県認定エコファーマー。ホテルマン、地方公務員、病院給食センター所長など様々な職を経て、2002年より実家のりんご園を継ぎ農家となる。虫よけには食酢を用い、摘果はすべて手作業で行うなど、独自の手法で無農薬のりんご栽培を成功させ、「対馬式自然循環農法」として確立した。2010年には農薬・化学肥料を不使用の農産物として青森県特別栽培農産物認証制度で第1号の認証を受ける。

Profile-2

杉山 孝彦（すぎやま たかひこ）

1960年、青森生まれ。合同会社チーム スシー代表CEO。18歳から仙台へ、25歳からは東京へ移住し文部科学省に入省、2007年に大阪で開催された世界陸上競技選手権大会では組織委員会の財務責任者を務めあげる。日本全国、世界各地を仕事で飛び回るうち、民間の立場から産業を支えていく人材が不足していると痛感、48歳で青森へ戻り独立し、起業・創業支援を行うコンサルタントとして奔走する日々を送る。